

非英語圏日本の言語空間における 〈英語〉概念の「特殊性」について

小 林 敏 宏

A Cultural-Semantic and Semiotic Perspective on the Notion of 'English' in Non-English-Speaking 'Kokugo' Sphere

Toshihiro KOBAYASHI

キーワード：英語，概念，パラドックス，哲学，効用，価値

目 次

はじめに

1. 「日本の英語」概念の変遷
2. ENGLISH-EIGO-KOKUGO 感覚の連続性
3. 「公理」としての ENGLISH の概念
4. 非英語圏日本のパラドックス
5. 「語学の哲学」のフィジカルとメタフィジカルの位相
おわりに

“English, as well as how we see literature, is constantly changing.”⁽¹⁾

Eagleton (2009: 7)

“In my understanding of its relevance today, humanism is not a way of consolidating and affirming what “we” have always known and felt, but rather a means of questioning, upsetting, and reformulating so much of what is presented to us as commodified, packaged, uncontroversial, and uncritically codified certainties...”⁽²⁾

Said (2004: 28)

はじめに

日本の「英語」研究は、今から 200 年以上前に興った〈英学〉を事始めとする。それ

は19世紀から20世紀にかけて行われた日本の「国民国家（nation-state）」の建設と「国語」の近代化と相俟って発展し、時代の要請に応じながらその形態と内実をダイナミックに変容させながら現在にまで至るまで続いている日本特有の国家プロジェクトの一つである。

本稿の目的は、“イングリッシュ（ENGLISH）”とその和訳語である“英語（EIGO）”という2つの用語の概念とその機能上の〈差異〉を文化意味論・記号論的視座⁽³⁾より析出することにある。その分析作業を通し、日本国内の「国語（KOKUGO）」空間において歴史文化的に条件づけられてきた‘我々（WE=NIPPONJIN）’の「英語（EIGO）」感覚の中に内包されてきた言語機能の〈特殊性〉⁽⁴⁾に関する性格付けを行いたい⁽⁵⁾。ここでは海外（英語圏）のイングリッシュ・スタディーズ（English Studies）の最先端の知見を、日本の「英語」研究と「外国語」習得の文脈に位置づけながら、英語圏とは異なる非英語圏の日本の特殊な言語環境の中で「商品化され、包装化され、議論の対象にならずに、無批判のまま記号化されて（“commodified, packaged, uncontroversial, and uncritically codified”）」⁽⁶⁾いる「日本の英語」の概念に関する考察をおこなっていきたい。

1. 「日本の英語」概念の変遷

日本人と英語の本格的な言語接触（language contact）はフェートン号事件（1808）にまで遡る⁽⁷⁾。当時、日本ではENGLISHはまだ「英語」とは表記されていなかった。まもなく辞書（『語厄利亜興学小筈』『語厄利亜語林大成』）の編纂がおこなわれ、そこでENGLISHは「語厄利亜（アンゲリア）語」と呼ばれるようになる⁽⁸⁾。アンゲリア語とは‘イギリス語’のことであるが、それが幕末期になるにつれて「英語（EIGO）」という訳語が定着する。ただその「英語」の内実はイギリス語とアメリカ語の両言語を重ね合わせた「英米語」であった。「英米語」とは英国と米国という2つの国家の公用語のことを意味するが、当時は英国にも米国にも国家の統一するような標準化された「国語」は十分に整備されてはいなかった。そうした国内の言語事情は当時の日本においても同じであった。当時の日本にも国民国家を統一するような「標準語」としての「国語」は存在していなかったのである。当時の日本人の言語感覚は書き言葉（漢語）と話し言葉（和語）に‘引き裂かれた’言語感覚⁽⁹⁾にあった。そのような自国内の特殊で不安定な言語環境の中で日本人は、英米両国の「国語」であるENGLISHに接近していたことになる⁽¹⁰⁾。

日本で英学が勃興した当時の世界情勢は大英帝国が極東アジアへ進出し始めた時期であり、英学者たちはENGLISHという言語を「語厄利亜（アンゲリア）語」から「英

語 (EIGO)」という記号で認識し始めていた。ENGLISH とは大英帝国の影響力を伝播させる〈ヘゲモニー言語 (hegemonic language)〉であった。〈ヘゲモニー言語〉とは世界の政治経済文化の領域において自国の影響を最大限に及ぼすことができる世界の大言語のことである。現在でいうところの「グローバル言語」のような感覚でとらえ始めていたといってもよいだろう。「諸厄利亜 (アンゲリア) 語」研究からはじまった日本の「英語」研究の中において、その研究対象である ENGLISH の既成概念は、19 世紀から 20 世紀にかけて English から British/American English へとシフトし、21 世紀に入るとさらに British/American English から Anglosphere 全体を包括する World Englishes へ、さらには World Englishes から Global Englishes へと変容している。このように「英語」の概念は過去 200 年の間に世界の政治経済文化の変化に応じながら刻々と単数形から複数形へと変化し続けてきているのである⁽¹¹⁾。

我々はここで非英語圏の「日本の英語」論を現在の英語圏のイングリッシュ・スタディーズの思潮の文脈の中に批判的に位置づけていく必要がある。というものの、このテーマを扱う時にはその概念の線引きの違いによって議論の展開の仕方が大きく変わってくるからである。研究の対象を「日本人の英語 (JAPANESE ENGLISH)」とするのか、日本の「英語 (EIGO)」にするのかそれとも日本の 'ENGLISH' とするのか、または 'ENGLISH in JAPAN' とするのかそれとも「日本の英語 (EIGO in NIPPON)」とするのか、これらの問題意識と問いの立て方は一見すると同じように感じられるかもしれないが、実際にはそれぞれの議論の視角 (perspectives) が大きく異なっている。例えば、英語圏の Global Englishes 研究の中の変種 (variety) とされる JAPANESE ENGLISH は非英語圏日本の国内に実態として本当に存在するのであろうか？ その JAPANESE ENGLISH の概念が本当に「日本の英語 (EIGO in NIPPON)」と同じ概念なのであろうか？というような具合に問題意識の差異から議論の争点が生まれてくるのである。

本稿の中心テーマは「日本の英語 (EIGO in NIPPON)」である。「日本の英語」とは、英語圏から見た JAPAN ではなく NIPPON という非英語圏の内側から見た、ENGLISH ではない EIGO という特殊な「日本の言語」、という意味が含まれている。上述したように、英学時代の「諸厄利亜 (アンゲリア) 語」を起源とし、非英語圏の日本で歴史的に形成されてきた「英語 (EIGO)」の概念 (または語感) には、鎖国から開国へ、近世幕末日本から近代国家日本 (NIPPON) へ、旧世界の不安定な「日本の言語」から新世界の安定した「日本の言語」へとシフトするグローバルな文化政治上の言語力学が色濃く反映されていた。当時の日本の「英語」研究の背後にはこの英米両国のヘゲモニー言語に対する「日本の言語」の「同化と抵抗 (assimilation and resistance)」⁽¹²⁾ という 2 つのベクトル作用がローカルとグローバルの両言語空間内で働いていたのである。

非英語圏日本では開国後は ENGLISH に「同化」しつつも、同時に自国の言語資源（漢語と和語）を利用しつつ、（後述するように）EIGO の〈中間的メタ言語〉の機能をフルに生かした創造的な翻訳作業によって「抵抗」し、「国語」（KOKUGO）の公共圏（非英語圏日本）の構築を行うというパラドキシカルな文化戦略があった。日本の「英語」研究（学術の領域）において「日本の英語（EIGO in NIPPON）」の概念を英語圏で用いられている JAPANESE ENGLISH や ENGLISH in JAPAN というような概念に安易に置き換えてはいけないのである。

英語圏と非英語圏の「国語」研究パラダイムの文化政治性

開国以来、「日本の英語」の概念形成に大きな役割を果たしてきたのが「学校（高等教育機関）」に所属するアカデミックエリートの「英語」研究者たちであった。彼らのアカデミックな「英語」研究の理論や形式や方法論は国民の「日本の英語」概念を形成する上で大きな影響力を有していた。この概念は 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて国民国家の成立過程の中においてアカデミックエリートたちの「英語」研究によって権威づけ（authorize）され「国民的文化」の一部となり、長い間日本人の意識の中に共有されることになった。だが、「日本の英語」はその後大衆化と国際化とグローバル化の波に晒されながら刻々と変容し続けている一方で、アカデミック領域においては十分に再吟味されぬままに既成概念と化してしまっている。その概念が現在の日本の世俗の「生」の「英語」経験をリアルに写し出す“鏡”となっているとは到底言い難い。エドワード・サイードは、世俗の「生」の世界における「歴史的経験」を抽象化されたテキスト内で等閑視（あるいは排除）してしまうアカデミックの〈知〉の権力性を問題化した。サイードはアカデミック領域の研究の理論と形式によって生成されるテキストと、非アカデミックな領域に在る歴史的な生の営みとの関係性を、テキストの「世俗世界性（worldliness）」⁽¹³⁾ と呼び、アカデミック領域と非アカデミック領域の間の連続性に注意を喚起した。

サイードのアカデミック領域のテキストに付された「世俗世界性」という概念を援用し、英語圏のイングリッシュ・スタディーズ領域に応用したのがアリスティア・ペニクック（1994）である。ペニクックはアカデミック領域で理論・形式化された「英語」研究のテキストが、アカデミックの外の領域、つまり現実の世俗世界とどのようにリンクし、そして乖離しているのかに着目し、「国際語としてのイングリッシュの文化政治性（the cultural politics of English as an international language）」に関する先駆的な研究を行っている。このペニクックの議論をさらに拡張し、グローバル・イングリッシュのもつ“ローカル領域内の政治性”に注目したのがセルマ・ソンドラックである。ソンドラックは *The Local Politics of Global Language* の中で、「最終的にはグローバル・インゲ

リッシュのローカルな政治性はローカル領域における権力の配置構造にかかっている」⁽¹⁴⁾と述べている。我々はここでペニクックの議論（国際語としてのイングリッシュの文化政治性と「世俗世界性」）と、ソンドックの議論（グローバル・イングリッシュのローカル領域内の政治性）の問題意識を、ローカル領域にある非英語圏日本の「英語（EIGO）」とその「世俗世界性」の問題に連結させた議論を新たに展開する必要がある。

非英語圏日本国内において、ペニクックやソンドックのような英語圏の「英語」研究者によって提出された議論と同様の議論として位置付けることができるのが、イ・ヨンスクによる非英語圏日本の「国語」研究である。イは『「国語」という思想』（1996）において「日本の言語」としての「国語」の概念とその「世俗世界性」と文化政治性に着目し、緻密かつ批判的な議論を展開した。しかし日本のアカデミック領域においては「国語（KOKUGO）」と「英語（EIGO）」と「イングリッシュ（ENGLISH）」という異なる効用価値を生み出す3つの異なる言語概念を突き合わせながら論じる研究はあまりなされてはこなかった。我々は日本の「英語」研究の「特殊性」を考察する上で、ペニクックの「国際語としてのイングリッシュ」とイの「国内語としての国語」の2つの議論を、もう一つのベクトルである非英語圏の「日本の英語」問題の文脈に絡めながら再考していくことが求められているように思われる。なぜなら、後述するように「英語（EIGO）」という概念が非英語圏の言語空間内では、国際語としてのENGLISHと国内語としてのKOKUGOの挟間のダイナミックスの中に配置される構造になっているからである。EIGOの概念にENGLISHとKOKUGOの2つの言語をそれぞれ対置させる時、サイドいうところの「対位法的読解（contrapuntal reading）」⁽¹⁵⁾の新たな文脈を把握することが可能となり、非英語圏の「日本の英語（EIGO in NIPPON）」の概念と特殊性を浮かび上がらせることができるようになる。

2. ENGLISH-EIGO-KOKUGO 感覚の連続性

日本では一般的にENGLISHという単語は「英語（EIGO）」という翻訳語に定訳化されている。辞書を紐解けばENGLISHとは主に「イギリス人、イギリス国民の言語（英語）、英文学、国際コミュニケーションのための共通言語（英語）」と定義されている。しかしこのような定義は決して固定的なものではない。英語圏のイングリッシュ・スタディーズの代表的研究者の1人であるロバート・イーグルストンも語っている通り「イングリッシュという概念は常に変化し続けている」⁽¹⁶⁾のである。英語圏における「英語」研究であるイングリッシュ・スタディーズという研究分野は、彼らにとっては日本でいう「国語（または国文学）」研究に近い感覚であることを忘れてはならない。イングリッシュ・スタディーズが非英語圏内に入るとそれは「英語（または英文学）」

研究となる。だが、“彼ら”の「国語（または国文学）」の視座と“我々”の「国語（または国文学）」の双方の視座から比較文化的に考察する日本人「英語」研究者は少ないのが現状である⁽¹⁷⁾。

「日本の英語」概念を吟味する上で最も重要な鍵語は「国語（KOKUGO）」という概念（または思想）である。「国語」とは国民教育のための「言語」として近代日本が創出した「国家語」⁽¹⁸⁾のことである。この KOKUGO によって国民生活の公共圏（public sphere）⁽¹⁹⁾と国家レベルのディスコース・コミュニティ（discourse community）⁽²⁰⁾が形成され、国民生活が外国語に依存することなく営まれるようになる。そこでは政治、経済、文化、教育活動に関わる思惟活動のすべてが KOKUGO によって可能となる。非英語圏の日本は 20 世紀の初頭に国家語による公共圏をほぼ確立した。当時の世界の「国際語」としての ENGLISH のヘゲモニーの伝播状況を鑑みれば、KOKUGO による国内公共圏の確立の過程は「非英語圏日本」の成立の過程を意味していた。その結果、非英語圏日本の ENGLISH 研究のテキスト（discourse）自体も KOKUGO によって生産することが可能となり ENGLISH を研究の媒介言語（interlanguage）⁽²¹⁾とする英語圏（ENGLISH のヘゲモニーの影響下）から自立することになるのである。このように ENGLISH というグローバル言語によって形成される Anglosphere のディスコース・コミュニティ（English discourse community）に対して、KOKUGO によって形成されるディスコース・コミュニティ（Kokugo discourse community＝「国語」公共圏＝“Kokugo-sphere”）が成立したのである。これは日本における実質的な言語文化のアウトアルキー（autarky）の確立とっていいだろう。

この時点において KOKUGO の公共圏内では ENGLISH は「媒介言語」から「対象言語（object language）」へとシフトすることになる。英学史を紐解くならば、非英語圏日本の KOKUGO の成立と「媒介言語としての ENGLISH」の終焉を象徴的に表している風景を 20 世紀初頭に確認することができる。明治 36 年（1903）5 月 4 日、東京帝国大学の「英文学（English literature）」の講座が、お雇い外国人であったイギリス人のラフガディオ・ハーン（1850-1904）の ENGLISH による講義から、東京帝国大学英吉利文学科出身で英国留学（1900-1903）から帰国した夏目漱石（1867-1916）による KOKUGO による講義へと移行した。我々はこの出来事が示唆する文化政治的意味をサイドのいう「世俗世界性」の観点からとらえ直しめることが重要である。なぜなら漱石にとって英国の「国語」である ENGLISH がもはや自らの「世俗世界性」に直結するテキストを生み出すための媒介言語ではありえず、自らの生活世界（life world）にダイレクトに繋がる言語は非英語圏日本に自立した KOKUGO になっていたことを示唆しているからである。

ENGLISH はそれ一語で English literature を意味する単語でもある。過去 80 年以

上もの間に亘り「日本の英語」の変遷をつぶさに観察してきた英学者外山滋比古（1923-2020）が現在の「日本の英語」について語る時、「英語」に「英文学」を並列させながら〈日本の英語，英文学〉と繰り返し表現している点を見逃してはならない⁽²²⁾。一般的には日本の「英語」研究では ENGLISH と「英文学」は等値概念（equipollent concept）として翻訳されている⁽²³⁾。だが、鈴木貞美が『日本の「文学」概念』で詳述しているように、文化意味論的な観点からみると英国の「国語（ENGLISH）」による「リテラチャー」（literature）のもつ語感（意味）と、非英語圏の日本における「国語（KOKUGO）」の「文学」がもつそれとの間には大きな差異が存在していることは現在の我々の意識からはどうしてもすり抜けてしまいがちである⁽²⁴⁾。「文学」と同様に漱石の ENGLISH と EIGO に対する語感は一変していた。漱石が『文学論』（1907）の中でも自ら語っているように⁽²⁵⁾、日本の伝統的な「世俗世界性」と直結する漢文によって培われた漱石にとって、English literature とはあくまでも英吉利の伝統的な「世俗世界性」と結びついた「文学」であった。それは非英語圏日本における「世俗世界性」の「文学」とは似て非なるものとして認識されていたのである。漱石にとって English literature とは二重の意味で日本の「文学」の伝統とは異なる「世俗世界性」を持った研究対象であったのだ。漱石にとって「英語と英文学」とは非英語圏日本の伝統を継承する EIGO と EIBUNGAKU であり、それは決して英語の本家本元の ENGLISH や ENGLISH LITERATURE とイコールなものではありえなかった。日本の「国語（KOKUGO）」とイギリスの「国語（ENGLISH）」の差異によって生み出される EIGO 感覚を身体化（embody）していた漱石は、異文化の相剋の真っ只中で苦しんでいた。しかしまさにその挟間の葛藤が漱石の創造力の源水となり、彼はイギリス本国の ENGLISH LITERATURE の先を行く新しい『文学論』の地平線を切り拓くことができたともいえるのである⁽²⁶⁾。逆にそうした異文化の相剋がなかったが故に、ENGLISH を国語とする英吉利の「文学」研究（English Literature Studies）は漱石の『文学論』の水準に達するまでに 25 年も月日を要してしまったのである⁽²⁷⁾。これは、代表的英学者の 1 人であった漱石の EIGO 感覚が ENGLISH の本国の「世俗世界性」に触発されながらも、非英語圏日本内の特殊な EIGO 感覚が生み出す創造力によって独自に KOKUGO の「世俗世界性」（のテキスト論＝「文学」論と小説）へと向かっていたことを如実に物語っている。

では非英語圏内における ENGLISH 感覚にある「世俗世界性」と KOKUGO 感覚の「世俗世界性」との間にはどのような繋がりがあった（ある）のであろうか？この 2 つの感覚は異なりこそすれ連続している、というのが本論の作業仮説である。その 2 つの感覚の「間」（中間領域）に生成されているのが EIGO 感覚である。非英語圏日本の公共圏においては ENGLISH 感覚を KOKUGO 感覚へと媒介する EIGO のメタ機能に注

目する必要がある。EIGO は ENGLISH にあらず、ENGLISH を KOKUGO の位相内に包摂する一種の中間言語の働きをもっている。これは翻訳論の視点から見ればより分かりやすい。ENGLISH という記号（シニフィアン）が指し示す意味（シニフィエ）を KOKUGO の「世俗世界性」の記号群の中に移し替える媒介言語として EIGO の働きを考えてみるとよい。EIGO の本質（nature）は完全に ENGLISH でもなければ完全に KOKUGO でもないその中間領域に配置されているメタ言語（metalanguage-cum-interlanguage）機能にある⁽²⁸⁾。メタ言語とは言語や言語体系を説明するために用いられる言語・記号体系のことである。それに対して、メタ言語によって説明される研究対象となる言語が「対象言語（object language）である。文化意味論の観点からみれば、非英語圏空間（日本）の「世俗世界性」をもつ言語空間で展開・生成される EIGO というメタ言語としての記号体系の働きと、それによって説明される対象言語である ENGLISH の機能が異なることは当たり前のことである。外山滋比古が指摘するようにメタ言語とは「手段ではなく、思考、発想形式そのものとしての言語」であり、これが（漱石の例で見たように）「新しい考え方をする原動力」として働きをもっているということなのである⁽²⁹⁾。

このように非英語圏日本において EIGO と ENGLISH は基本的に異なる位相に配置された2つの異なる記号体系である。EIGO=ENGLISH という漠然とした言語感覚をもってこれらがあたかも同一言語であるかのごとく扱ってはいけないのである。EIGO の「説明言語」体系によって説明（相対化）される 'ENGLISH' は KOKUGO 感覚の中に同化させられていくのである。その働きを裏付ける証左となっている事例として、学校の科目（subject）としての EIGO クラスの言語空間を考えてみると、そこでは ENGLISH の言語体系に対する説明力（文法力）と ENGLISH の文章の意味を KOKUGO に置き換える和訳力が絶えず重視されてきた（現在でもそうなっている）ことが分かる。これは非英語圏の「日本の言語」機能がその近代性（または先進性）⁽³⁰⁾を担保し続けるために〈ENGLISH-EIGO-KOKUGO〉の有機的な連続性を重んじてきた（いる）からに他ならない。誤解を恐れずにいうならば、非英語圏の EIGO 感覚とは、ENGLISH 感覚と KOKUGO 感覚の2つの「対」を有機的に取り囲む「間（MA または AIDA）」⁽³¹⁾の感覚の中に存在している、ということができると思う。

日本では EIGO という概念がもつ語感と ENGLISH の概念の語感には大きな隔たりがある。この概念の差異から生まれる「語感」を明示的に説明する理論的枠組みが必要になる。そのためには本稿で論じているように日本の EIGO と ENGLISH の「語感」⁽³²⁾の連続性（continuum）を析出する記号論的構造分析アプローチが有効である。「英語（EIGO）」という語感の中には、まず第一にそれに対峙する「国語（KOKUGO）」という響きが内包されており、その外延に対峙する言語を「外国語」と呼んでいる。第二に、

その「国語」という語感の外延には「日本語 (NIHONGO)」という言語層が広がっている。戦後の日本の英語教育界を牽引した小川芳男がかつて「外国語としての日本語」について語っていた時⁽³³⁾、小川がそこで言わんとしていたことは「我々」の空間内に閉じられた「国語」の外延に開かれた「日本語 (NIHONGO)」のことを指している。「国語」の外延には「国際語 (KOKUSAIGO)」圏が広がっているが、この‘国際’という「間」(AIDA)の言語圏では「日本語 (NIHONGO)」もおのずと一種の「外国語」となる JAPANESE へと転調し、同様に「英語 (EIGO)」も「外国語」である ENGLISH (=English as a Foreign Language) へと転換させられる。双方とも外部へ開かれた「国際語」の言語空間に二重の層に広がる様相を呈している。つまり、「国語 (KOKUGO)」と「英語 (EIGO)」は国内の非英語圏内 (=国語圏内) の概念であるのに対して、国語圏と英語圏の内延空間に「日本語 (NIHONGO)」が生起し、JAPANESE と ENGLISH は国語圏と英語圏との間の外延空間に「外国語」または「国際語」として広がりをもつ概念となっている。このような「日本の言語」空間の諸相の重層的関係性と各位相の概念の言語認識の差異をしっかりと理解できているかどうか、「日本の英語」概念の本質を理解するための第一歩となる⁽³⁴⁾。

非英語圏日本の EIGO と JAPANESE ENGLISH

我々は先に ENGLISH-EIGO-KOKUGO-NIHONGO-JAPANESE-ENGLISH という「国語」圏の言語空間内の連続的な重層配置 (内延—外延) 円環構造について確認ができた。この「国語」に内包されている重層的な言語構造の中核に据えられているのが「日本の英語」の中心概念となる ENGLISH-EIGO-KOKUGO の「三価構造 (triad)」である。この視座から眺めていくと、我々が「日本の英語」という時、それは EIGO in NIPPON と ENGLISH in NIPPON という同空間層内に配置された2つの異なる「言語」を指していることになる。

しかし、ここで1つ考えておかなければならない問題がある。それはいわゆる“ジャパニーズ イングリッシュ (JAPANESE ENGLISH)”についてである。日本で使われる英語または日本人の使う英語を称して“ジャパニーズ イングリッシュ”と呼ぶ(または呼ばれる)ことが多い。このどこか嘲笑的な響きをもった“ジャパニーズ イングリッシュ”という概念を「日本の英語」の重層的配置 (内延—外延) 構造の関係の中でどのように捉えていったらよいのであろうか? 海外のイングリッシュ・スタディーズにおいて、この論点に関して学際的 (認知論的, 記号論的, 意味論的, 民族学的, 文化人類学的) 視角から議論を展開している研究がジェイムズ・スタンローの *JAPANESE ENGLISH* (2004) である。スタンローは従来の日本の“イングリッシュ”研究の枠組みを疑い、次のような仮説を提示する。

まず本書で最初に述べておきたいことは、私は他の研究者たちとは異なり、日本で使われているイングリッシュとは、その言語自体が実際に外国から「借用」されたものであるとは考えていない、ということである。少なくとも私の目から観ると、日本で見られる“イングリッシュ”のほとんどが日本で日本人の目的のために創り出されたものであると考えているからだ⁽³⁵⁾。

スタンローの研究で取り上げているのは主に日本国内で使用されているいわゆる「和製英語」の問題ではあるのだが、ここで注目しておくべき点は、日本のイングリッシュが記号論・意味論的視角から括弧つきの‘イングリッシュ’として認識されている点である。つまり、我々がここで注目すべきは、日本には本家本元の ENGLISH とは似て異なる ‘ENGLISH’ が存在する、という視点である。スタンローはさらに「日本のイングリッシュ」について次のように主張する。

しかしながら、良くも悪くも我々は次の事実を受け入れるべきなのである。すなわち、(日本では) イングリッシュはジャパニーズ・ランゲージ (日本の言語) である、ということだ。一見するとそれは何か異様な風景にも思えるかもしれない。それはインターナショナル・イングリッシュ (国際英語) を研究する専門家たちにとってもそう思えるであろう。……しかし、私が本書で論じているように、イングリッシュとジャパニーズはいまや日米経済が分離不可分のように一体となっているということだ。いや、さらにいうなら、今日の日本はイングリッシュなしでは存在できないくらいだ。インドのように英語は日本社会にとって必要不可欠な言語となっている⁽³⁶⁾。

ここでスタンローは“ジャパニーズ・ランゲージとしてのイングリッシュ (‘English as a Japanese language’)”という概念について論じている。これはイングリッシュとジャパニーズの連続性の文脈を土着文化のダイナミズムの中で捉える議論として、本稿の論点に接近する視点となる。しかし、記号論的・意味論的アプローチも巧みに援用するスタンローの研究においてさえも「国語としての英語」や「外国語としての日本語」といった「日本の英語」の円環構造のダイナミクスについて新しい知見を得ることができない。スタンローの視点に欠けてしまっているのはイ・ヨンスクや小川芳男の議論で提出されている視角 (非英語圏内の「日本の言語」の特異性) である。とはいえ、スタンローの議論は、「世界の英語 (World Englishes)」研究の枠組みの中で「日本の英語 (JAPANESE ENGLISH)」を English の変種 (variety) として見なしたがる海外のイングリッシュ・スタディーズの限界を超える新しい分析の枠組みを提供してくれて

いる。

「世界の英語」研究では英語圏の一部であるシンガポールのような多言語・多文化国家に土着化した SINGLISH を「独立」した ENGLISH の変種として見なしている。一方で、非英語圏である日本の「世界世俗性」の中には、ENGLISH の変種と見なす“JAPANESE ENGLISH”という言語はそもそも実体としては存在していないと考えるのが妥当である⁽³⁷⁾。そこに在るのは ENGLISH を KOKUGO の中に土着化させつつ JAPANESE も生み出す EIGO という中間的メタ言語 (metalanguage-cum-interlanguage) の概念だけである、というのが筆者の議論 (argument) である。スタンローが指摘するように、日本国内において ENGLISH をベースにしたカタカナの多くが KOKUGO の中に土着化されただけでなく EIGO の語感によって創出された JAPANESE LANGUAGE そのものなのであり、それは ENGLISH とは似て非なるものであることは間違いない。それ故に、EIGO を World Englishes (Asian Englishes) の変種 (JAPANESE ENGLISH) として「既成事実」化してしまう議論には警戒する必要がある。だが、我々の本稿の主な関心事はスタンローが描出を試みている JAPANESE ENGLISH の実態に対する言語認識についてではない。むしろ、「国際語としての ENGLISH」とは異なる非英語圏日本の特殊な言語空間に組み込まれている EIGO という「言語」概念についてである。それは、スタンローが捕えようとしている JAPANESE ENGLISH の言語認識の深層で働いている言語感覚のことである。日本の「英語 (EIGO)」の特殊性を十分にとらえるために必要なのは World Englishes の視角ではなく、国際語である ENGLISH の worldliness (「世俗世界性」) への眼差しであり、引いてはそれに対する非英語圏日本の KOKUGO の公共圏内の worldliness への視座である。この非英語圏内の「特殊」な「日本の英語」の概念を理解するためには、より明瞭な説明理論を必要とする。そこでスタンローに続く、英語圏の代表的な「日本の英語」研究をさらに概観しておくことは有益である。

3. 「公理」としての ENGLISH の概念

ロバート・イーグルストンは *Studying English* (2016) の中で英語圏のイングリッシュ・スタディーズで用いられる“イングリッシュ (ENGLISH)”の概念 (idea/notion/concept) の流動性について次のように喚起する。

イングリッシュという概念は、リテラチャーのそれと同様に常に変化し続けている。すべての学問領域は時間と共に変化する。例えば、化学という学問領域も現在では 300 年前、100 年前、50 年前のそれとは大きく異なっている。さらに言えば、学問

領域とは、誕生し、発展し、そして時間と流れの中で衰退・解体されていくものである。イングリッシュとは比較的新しい研究分野である。現在のイングリッシュの研究形式もほんの3世代から4世代くらい前に形作られたものにすぎない。またそれは最も速く進化し発展し続ける研究分野の一つとなっている。……現在におけるイングリッシュという分野の研究射程はますます広範囲に及ぶようになり、数多くの難問に取り組まなければいけない時代となっているのである。イングリッシュを研究するまたは教える立場にある者たちにとってもこうした学問の変化の影響から逃れることはできないのである⁽³⁸⁾。

このような“イングリッシュ”の概念の〈流動性〉の問題を非英語圏日本の「英語」問題に結び付けた数少ない研究書の1つにフィリップ・サージェントの *The Idea of English in Japan* (2009) がある。サージェントは日本の「英語」概念を扱う前に、英語圏のディスコース・コミュニティ内の ENGLISH STUDIES において、その研究の中核となる‘ENGLISH’の概念そのものがアプリオリな「公理」のようなものとして扱われている事実を批判し、そこに含まれる問題を次のように指摘する。

‘イングリッシュ’という所与の概念は常に（英語圏における内省的なイングリッシュ・スタディーズの）あらゆる研究形式における「公理」のような大前提とされている。‘イングリッシュ’を研究対象として取り上げている中においては、まず最初にその‘イングリッシュ’が何を意味するのか、その特定の意味を定義することから始めなければならない。だが、そのように研究対象を定義することでかえってその研究対象を客観的に捉えることができなくなってしまうという事態が生じ、従来の研究の大前提や研究者の特定の動機や目的から部分的に影響を受けることになってしまうのである⁽³⁹⁾。

ここでサージェントは非常に重大な認識論上の問題について言及している。その問題とは本来定義すべき研究対象が「変化」し続ける対象であった場合に、その特定の側面だけをもって定義する（＝概念を固定化させる）ことで逆に研究対象への客観的接近を不可能にしてしまうという、研究の本質に絡んだ認識論上の難題（aporia）のことである。サージェント自身は触れていないことであるが、ここにはさらにもう一つ厄介な問題が混在している。英語圏における‘イングリッシュ’研究の「厄介さ」は研究の対象である‘イングリッシュ’（という言語）自体が研究目的のための手段となってしまうことにある。‘イングリッシュ’を用いて‘イングリッシュ’を研究しなければならないという方法論上の境界線上には、いわゆる「観察者効果（observer effect）」や「観

察者バイアス (observer bias)」といった問題が生み出されることになる。英語圏 (英語言説共同体) 内で「英語 (‘イングリッシュ’)」を日常生活言語 (手段) にしている研究者がその言語自体を研究の目的・対象 (object) に取り上げる。するとその研究がどれだけ「内省的 (reflective)」であったとしても「あらゆる研究形式」における目的と手段の不分離状況から ‘イングリッシュ’ を「公理」(所与) なものとして扱う他に「逃げ場」がなくなってしまうのである。その行き着く論理的帰結についてサージェントは続けて次のように云う――

このように、その研究目的・対象は……「恣意的」なものになっているのである。かくして「公理」としての ‘イングリッシュ’ には固定的・普遍的な価値を持ち合わせるができなくなるのである。この ‘イングリッシュ’ のもつ恣意性を起因にして、そこから様々な派生的な学問領域が生み出されることになっている⁽⁴⁰⁾。

つまり、英語圏のイングリッシュ・スタディーズの ‘イングリッシュ (ENGLISH)’ という概念は普遍的な価値を持ち合わせていない「特殊」な属性を帯びた概念であるということだ。英語圏のイングリッシュ・スタディーズが本質的には「特殊性」を帯びた学問領域であるならば、その研究の ‘ENGLISH’ の概念を理論的にそのまま非英語圏の日本の文脈に当てはめることはできない。サージェントは日本には日本の「特殊」な歴史・政治・文化的な事情があり、それを ‘ENGLISH’ の「普遍的」な概念で分析することはできないと述べている⁽⁴¹⁾。このような内省的な議論からサージェントは、従来の英語圏内のポストコロニアル英語研究 (World Englishes) 分野などでもこれまで敬遠されがちであった「日本の英語」問題⁽⁴²⁾に関心をよせ、その核心部分である日本国内の特殊な ‘ENGLISH’ の概念に注目した点は慧眼であるといえる。この視角からサージェントは日本の ‘ENGLISH’ の概念を読み解く手がかりが、日本の「国語」と深く結びついた ‘ジャパニーズ (JAPANESE)’ というイデオロギー概念にあるという点に到達している⁽⁴³⁾。サージェントのこの議論はブライアン・マクベイがすでに *Japanese Higher Education As Myth* (2002) の中でも取り上げていた論点でもあるのだが、マクベイは ‘ENGLISH’ の普遍的価値を大前提にした議論を展開し日本の閉鎖性と後進性を批判するものであったのに対して、サージェントはその議論の上を行く非英語圏日本の「特殊」な ‘ENGLISH’ の概念分析を行い、比較的中立かつ公平な議論を提示している⁽⁴⁴⁾。だが「日本の英語」の概念の内実はスタンローやマクベイやサージェントが語る以上にさらに複雑である。日本の「英語」研究の要となるのは ENGLISH の概念ではなく EIGO の問題であるからだ。

上記のような英語圏のイングリッシュ・スタディーズの議論を念頭に置きつつ、次に

非英語圏の「日本の英語」の概念の中核に迫っていくことにする。

4. 非英語圏日本のパラドックス

英語圏におけるイングリッシュ・スタディーズにおける「日本の英語 (JAPANESE ENGLISH または ENGLISH in JAPAN)」研究の中でも見落とされがちな「死角」とは一体どこにあるのだろうか？それは英語圏の「日本の英語」研究の理論的枠組みの中に ENGLISH-EIGO-KOKUGO という重層的な言語認識 (semiotic triad) に対する洞察が不十分であるところに原因がありそうだ。非英語圏の「日本の英語」研究の「公理」となる概念は ENGLISH ではなく EIGO の本質にある。我々はこの視点から EIGO と ENGLISH の語感 (概念) の差異の中に潜んでいる非英語圏日本国内の「特殊」(重層的) な言語認識にもっと目を向けるべきである。海外のイングリッシュ・スタディーズの中の「日本の英語」研究では ENGLISH と KOKUGO の間 (AIDA)⁽⁴⁵⁾ に配置されている中間言語としての EIGO の位相が「死角」となっている。非英語圏の外から見える 'ENGLISH in JAPAN' の現象面のみを記述する実証的な研究の限界はそこにある。マクヴェイらの研究に代表される海外のイングリッシュ・スタディーズの枠組みから見れば、日本の言語政策によってお墨付きを得た学校教育内で流通する "EIGO" は ENGLISH の疑似言語⁽⁴⁶⁾ に過ぎず、EIGO は国際感覚を養うどころか、それは結局のところ日本人意識 (Japaneseness) を強化するだけの「偽物」の ENGLISH であり、日本の高等教育 (大学) の英語教育は機能不全に陥っている神話に過ぎない、という徹頭徹尾な日本文化批判のロジックとなる。一方で、マクベイの議論の先を行くスタンローは日本の教育現場における EIGO の「疑似性」の問題を英語中心主義的な視点から価値判断するのではなく、World Englishes の議論の枠組みの中で文化相対主義的な立場から日本の JAPANESE ENGLISH は日本の言語政治文化の中で「特殊」な機能をもつ「日本の英語」の一部としてみるべきである、というような中立的な立場を取っている。だが、いずれにせよ両者の議論に共通していることは、「日本の英語」の中に組み込まれている ENGLISH-EIGO-KOKUGO という重層構造に対する洞察が欠如している点にある。そこには非英語圏日本の KOKUGO と ENGLISH と EIGO の連続性と重層的配置が生み出すダイナミズムに切り込む議論がないのである。

この点において、スタンローの議論のさらに先を行くサージェントの議論には注目すべき点が多い。例えば、サージェントは日本における ENGLISH はグローバル空間からはかけ離れているが、それは国内空間と国際空間の境界線を拡張する働きをもち、日本人の言語表現媒体と国民的アイデンティティーを拡張する文化交渉の場 (site) となっていると指摘する⁽⁴⁷⁾。さらに、特筆すべき点として、サージェントは池上嘉彦やロラン・

バルトラがいう「記号」としての〈空〉間の概念 (the ‘emptiness’ of sign) を援用⁽⁴⁸⁾し、「日本の英語」の「見えない」潜在的な働きの位相に肉迫している。サージェントは、非英語圏の日本社会の言語の〈空〉間の中では ENGLISH は「複雑で、土着文化の中で揉まれながら、創造的に受容された (‘complex, highly contested, much appropriated’)」概念になっている、という。そこでは ENGLISH は顕在的には「グローバル・コミュニケーションの道具」としての存在するのと同時に、潜在的にはバルトの云う「未知の言語 (‘unknown language’)」としても存在している、という非常に興味深い仮説を提示している⁽⁴⁹⁾。そしてこれは西洋の論理や言語道具観 (occidental logic and instrumental use) では説明のつかないパラドックスとなっているように思われる、と述べている。バルト (1982) が「日本の言語」の記号性に注目し、それは「全てがプロセスである非言語 (‘all process and no product’)」の働きに注目したように、サージェントも ‘ENGLISH in JAPAN’ の未知の次元のダイナミズムに切り込む議論を展開し、非英語圏における「‘ENGLISH’ の〈空〉間を創造するプロセス」⁽⁵⁰⁾に対する視座を切り拓いている。管見によれば、このサージェントの鋭利な議論は英語圏の「日本の英語」研究において最も本質的な議論を提示していると思われる。だが、そのサージェントでさえ「‘ENGLISH’ として見なされるための〈空〉間を創造するプロセス」に日本の EIGO が「未知の言語 (‘unknown language’)」として機能している点には気づくことができていないのである。

我々は先に、ENGLISH によって記述される英語圏のイングリッシュ・スタディーズの根底には「公理」としての ENGLISH の概念があり、それは「普遍的」な概念とはなりえない「特殊」な概念であることを確認した。英語圏内の「特殊」な概念を「公理」とするイングリッシュ・スタディーズのプラットフォームではどうしても研究者の ENGLISH の概念と問題意識の差異によって多種多様な領域へと分化 (拡散) してしまいがち。ましてや非英語圏の日本の「特殊」な EIGO の概念を英語圏の「特殊」な ENGLISH の概念でもって捉えることは原理的にさらに困難である。とはいえ、マクベイやスタンローやサージェントらのイングリッシュ・スタディーズ研究から我々が得られる最も重要な教訓は「自国語で自国語を認識することの難しさ」である。ENGLISH を母国語としている研究者が ENGLISH を ENGLISH で認識することが原理的に厄介な問題を抱え込んでしまうのと同じように、日本人が「国語 (KOKUGO)」で「国語 (KOKUGO)」を認識することは容易でないのである。これはまさに「媒介物」を介在させずに自分の目でもって自分の目を認識することができないという認識上のパラドックスである。

因果関係が逆転して通常の因果律では説明がつきにくい日本の文化現象を海外の知識人はしばしば ‘ジャパン・パラドックス’ と呼ぶ。英語圏のイングリッシュ・スタディー

ズの「日本の英語」研究者を悩ませる問題も一種のジャパン・パラドックスとなっている。よくよく考えれば英語圏の「国語」問題の中にもイングリッシュ・パラドックスなるものは存在しているわけであるが、殊に非英語圏の ENGLISH 問題になると英語圏の研究者の目には「先進国である日本」の「英語 (EIGO)」が“後進的 (非国際的)”な産物として映り、それを批判の対象にしたがる傾向が強い。しかし、それは浅薄な解釈であるといわなければならない。「国語」の一部として和製英語は生み出すが「国際語」の ENGLISH の機能をもたない (一見すると) “中途半端” な「日本の英語」のパラドキシカルな特殊性 (EIGO パラドックス)こそが、まさに英語圏のイングリッシュ・スタディーズの「日本の英語 (ENGLISH in JAPAN)」研究の‘泣き所’となっているのである。

奇妙なことにこうした状況は日本国内の「日本の英語」研究においても起きているようである。その理由は日本の「英語研究」が (特に戦後長期間にわたり) 英語圏のイングリッシュ・スタディーズをモデルにしてきたことにある。それによって非英語圏日本内においても「日本の英語」の特殊性に対する洞察のための視座が失われてしまったように思われる。現在においてもこのような状況下にあることから、本稿では英語圏のイングリッシュ・スタディーズの「特殊」な ENGLISH の概念を相対化するために非英語圏日本における「特殊」な EIGO の概念と突き合わせて論じているわけである。ここで我々がすべきことは、海外のイングリッシュ・スタディーズの物差しを用いて「日本の英語」を悪戯に何か後進的でどこか劣っていて、より価値の低いものとして見なすのではなく、非英語圏日本の「英語」概念 (三価構造: ENGLISH-EIGO-KOKUGO) を歴史文化的視座から相対的に再吟味することである。

ここで「日本の英語」の特殊性を再考する入り口になる議論として、グローバル企業マイクロソフト日本法人の元社長でもあった成毛眞が『日本人の9割に英語はいらない』(2013)の中で紹介している事例を確認しておくことは非常に有益である。日本人が国民全体で (EIGOではなく) ENGLISH の能力を身につけないとあたかもこの国家が減びてしまうというような「共同幻想」が蔓延する現在の日本社会の中において、成毛は社会的成功者でなければ口外を憚られる国際的な議論を提示する。それは、近代言語を創出することに成功したことで非英語圏となった日本の「世界世俗性」に根差した言語社会学的事実に関する議論である。その要諦は、日本の多くの一般国民にとって英語は日常生活圏 (「国語」公共圏) 内においては絶対的に必要な言語ではない、という点にある (成毛がここでいう「英語」とは ENGLISH のことであり EIGO のことではない点に注意されたい)⁽⁵¹⁾。また成毛はアジアの代表的「英語圏」にあるインドを例と取り上げて「日本の英語」事情の特殊性について次のように説明する。

インドでは19世紀から高校も大学も授業はすべて英語で行われている。中産階級以上の人は英語のネイティブスピーカーであり、英語が話せるインド人は9000万人にも及ぶといわれている。加えて、インドの書店に置いてあるのは、ほとんどが輸入ものの洋書だという。そう聞いて、「インドはそんなに進んでいるのか」「日本はインドに負けているではないか」と驚き、焦る人もいるかもしれない……インド人は日本の大学では日本語で授業が行われていると知ると、驚くのだという。日本人の英語力の低さに驚いているのではない。日本人が母国語で自然科学や社会科学といった高度な学問を学べることに驚くのである⁽⁵²⁾。

ここで重要なポイントは、日本は非英語圏であり ENGLISH に依存しない「国語」で公共圏が成立しているという事実である。さらに続けて成毛はアジアの英語「先進国」である現在のインドの言語事情について次のように言及する。

インドはイギリスの植民地だった歴史がある。インド人がエリートの道を歩むには英語を学び、英語で西洋発の学問を学ぶしかなかった。インドの公用語はヒンディー語であり、英語は準公用語である。だがヒンディー語もインド人全員が話せるわけではなく、地域によって使う言語は異なる。大学の授業をそれぞれの言語で行うのは不可能なので、結局、英語を共通語にするしかないのである。現在、インドでは英語偏重の教育を疑問視する声があがっている⁽⁵³⁾。

ここで語られていることは、アジアの「英語圏」の代表国の1つであるインドは一見すると「日本の先を行く」ように見える英語(=ENGLISH)教育「先進国」であるのだが、その言語文化的「先進性」の理由が、自国語による国家統一と公共圏(「世俗世界性」)の成立をなしえなかった歴史文化的ハンディキャップ(「後進性」)の産物である、というアイロニカルな事実を確認しておこう(こうした事情はシンガポールもフィリピンでも同じである)。

ENGLISH によるインドの「植民地」化(国民を二分化するイングリッシュ・ディバイド問題)状況については明治期において英学者福沢諭吉の門下生であった馬場辰猪によって報告されていたことであり、自国語の不在がもたらす国家建設のリスク(ヘゲモニー言語による不平等な「世俗世界性」の固定化)については当時の多くの英学者の間でははっきりと認識されていた事実である。先に挙げた英学者夏目漱石にとっても ENGLISH と自国語の「世俗世界性」の関係性は極めて実存的な問題であった。

翻って考えてみるに、今日の日本の「英語」に対する国民的眼差しはインドのそれに益々近づいているようである。少々パラドキシカルな言説となってしまうのだが、ここ

で言いたいことはこうである。非英語圏日本の国策としての「学校（教育制度）」の中において、実質的な意味において最も「役に立つ英語」でありえたのは英語圏内のヘゲモニー言語の ENGLISH ではなく EIGO であった（現在もその事実は変わっていない）。非英語圏内で国民を育成することを目的とした「学校」という公共空間における外国語教育は、語学の専門学校のように外国語の技術の修得を主たる目的としていたわけではない。その第一の目的は非英語圏下にある日本社会の「世俗世界性」に直結する「国語」を強化しつ、国民の全人格的な人間教育を行うことにあった（またはある）。こうした事実を再認識し、それを改めて客観的な立場から見ていくならば、非英語圏の学校教育制度内における「日本の英語」で本当に必要とされてくるのは ENGLISH のもつ国際的なコミュニケーション能力よりも、ENGLISH（グローバル言語）の機能を相対化する KOKUGO の機能や国民の自画像（アイデンティティ）の創出・更新に貢献する⁽⁵⁴⁾〈中間言語〉としての EIGO の機能である、と考えることができる。日本の「外国語教育」の軸が歴史的におのずとそこに置かれてきたことはある意味で当然の帰結（consequences）であった⁽⁵⁵⁾。英語圏の ENGLISH の概念（「公理」）を悪戯に振り回し、非英語圏内の EIGO の特殊な働きとその効用価値には一切目を向けようとせず、ただそれを「非国際的」であるとか「非実用的」であるとか「役に立たない英語」といったレッテル張りをして「問題」と見なす偏向的な議論はいい加減にやめるべきなのである。こうした議論になると、非英語圏の学校の「日本英語」が「非国際的」「非実用的」「役に立たない英語」のままでいいのか、という批判がすぐに出てくるのであるが、そうした議論は非英語圏日本における「英語」の概念を歴史文化的文脈の中で正しく理解し損ねていることから生まれる残念な発想（極論）であるといわねばならない。非英語圏日本の EIGO の概念とその働きは国際英語圏の ENGLISH の有用性を否定したり、それに対立する概念では決してないのである。繰り返すが、「日本の英語（EIGO）」の特徴（または特殊性）とは ENGLISH-EIGO-KOKUGO の連続的かつ重層的な三価構造の間（AIDA）に存在しているのである。

5. 「語学の哲学」のフィジカルとメタフィジカルの位相

英語圏のイングリッシュ・スタディーズにおける「日本の英語」研究で見落とされてしまっているのは EIGO の文化意味論的位相（ENGLISH-EIGO-KOKUGO の連続的かつ重層的構造）である。この3つの位相は等価値なものであり、かつ密接不可分な関係を持っている。ENGLISH と EIGO と KOKUGO はそれぞれ等価値なものであるべきという見地から、半世紀も前から EIGO の価値に対する弁明（apologia）を一貫して行ってきたのが外山滋比古である。外山は『外国語を考える』の中で「語学の哲学」

非英語圏日本の言語空間における〈英語〉概念の「特殊性」について
について次のように語っている。

体で覚えることばをフィジカル（身体的、あるいは形而的）な言語と呼ぶならば、それを超越したことばはメタフィジカル（形而上的）言語ということになる。ことばは実用への手段であるばかりでなくて、それ自体が文化となりうる、それがメタフィジカルな言語である。外国語においてもフィジカルな語学とメタフィジカルな語学の両方があるべきで、両者はいがみ合うのではなく、互いに補い合って共存することが望ましい⁽⁵⁶⁾。

ここで外山が言っていることは、先に述べた非英語圏内の「日本の英語」の密接不可分で等価値な ENGLISH と EIGO と KOKUGO が非均等（asymmetrical）な関係に陥らないようにすべきである、という警鐘に他ならない。外山は続けて云う――

哲学としての語学は、また、思考力の涵養や人間形成にも役に立つものであるが、会話のように目に見える効用ではないだけに、多忙な社会からはなかなか認められにくい。母国語はもともとフィジカルな要素がつよいので、ことばの哲学に達することはかえって外国語よりも困難であることが少なくない。そういう母国語の短を補うことも外国語の重要な役割である。最近のように話す外国語が多くの人々の関心になっているときは、ことに語学の哲学が強調される必要があるように思う。そうでないと明治以来、わが国の文化を動かしてきた思考はその源水の一つを失ってしまうことになるかもしれない⁽⁵⁷⁾。

ここで外山は非英語圏内にある「日本の英語」の概念の一部である「国語（KOKUGO）」との関係性とその効用価値について語っているといつてよい。明治―大正時代の国家プロジェクトであった〈方法としての英学〉の異文化アプローチ（接近法）を一言で表現すれば〈採長捕短〉の思想⁽⁵⁸⁾に行き着くのであるが、外山のいう「哲学としての語学」の思想もまさに日本の伝統的な「英学の思想」の系譜の中に位置づけることができる。

外国語がもたらすパラドキシカルな「破壊作用」

さらに外山は英学の伝統的な異文化アプローチが生み出してきた自国文化の「破壊と創造」の「パラドキシカル」な効果について次のように語っている。

しかし、こういう（自然な環境でのおずと習得できる言語習得が理想である、とい

うような言語教育上の)「自然主義」は反省されなくてはならない部分をもっている。また、田園的比喻を借りるならば、春先き麦ふみということが行われる。ふまないと茎が弱くなるという、麦ふみという一見、破壊行為と思われるものが、かえってプラスにはたらくところがふしぎである。リンゴやナシのような果樹は、たえずセンチということをしてやらないと、枝だけ茂って、実をつけなくなってしまう、かりに実がなっても、小さなものしかできない。すなわち、自然に任せておいては、すぐれた結果にはならない。どうしてそうなのかはわからないが、とにかくセンチという不自然な妨害作業を行わないと、りっぱな成果を得ないところがきわめておもしろい⁽⁵⁹⁾。

ここで外山は田園の風景を引き合いに出し、自然に対する反自然主義的な行為がもたらすパラドックスに注目し、その原理が非英語圏の外国語(「日本の英語」)の文脈の中でも働いていることを以下のように指摘する。

ことばでも母国語だけの自然に任せておくと、不毛になりがちである。言葉からりっぱなものを生み出そうとするなら、そうしてもセンチに似た不自然なことが必要のようである。それには何も外国語に限ったことはないが、われわれの言語意識の中へ全然未知の言語を導入して得られる鮮烈な刺激は、けだしセンチ効果として最高のものであろう。国語の先生あたりから、英語の時間に日本語を乱してこまるという苦情をよくきくことがあるが、その母国語の破壊ということの故にこそ、外国語教育は価値があるのだということもできるのである⁽⁶⁰⁾。

ここで外山が語っている「英語」とは中間的メタ言語(metalanguage-cum-interlanguage)である EIGO の位相を指しているものであり、決してその外延にあるフィジカルな自然言語としての ENGLISH ではないことは明らかである。また、EIGO が KOKUGO(国語)と ENGLISH(外国語)に与える「破壊効果」について続けて次のように云う――

破壊を伴わない成長はない、われわれは外国語の学習ではげしい抵抗感を経験することによって、はじめて言語の感覚をはっきりさせるようになる。したがって、母国語に何の影響も与えないような外国語教育は、その本来の機能を失っているといつてよいのである……戦後の教育においては、自由とか自然とかということが重視されて来た。不自然な効果をねらった教育などというものは一般からは白眼視されるにきまっている。育てるには一部を損傷させなくてはならぬ、というパラドックスも

忘れられている⁽⁶¹⁾。

この外山の指摘は本稿の「日本の英語」の概念（ENGLISH-EIGO-KOKUGO）の三価構造（triad）のダイナミクスを読み解く上で大きなヒントを与えてくれている。メタフィジカルな中間言語である EIGO は、英語圏のフィジカルな日常の自然言語である ENGLISH の「世界世俗性」と、非英語圏のフィジカルな日常の自然言語である KOKUGO の「世界世俗性」の双方に対して、一種の「破壊作用」をもたらす働きをもっている、と考えることが可能になるからである。そこでは EIGO の KOKUGO に対する破壊作用によって ENGLISH は相対化され、ENGLISH に対する破壊作用によって KOKUGO が逆に強化・維持されているというメカニズムである。そしてなによりもこの破壊作用が言語の創造的作用に繋がっているという点が重要である。「日本の英語」のメタフィジカルな EIGO の位相からもたらされる破壊作用によって、KOKUGO の中に「和製英語」やカタカナ語が創り出され、英語由来の翻訳的日本語表現や発想形式の型が次々と組み込まれてきた（また現在でも組み込まれ続けている）と考えることができるのである。

「思考のための言語」としての‘メタラング’

最後に外山は非英語圏日本の言語環境における日常の生活言語であるパロール（parole）と、それを知識化したラング（langue）がもつ「具体的事物との関係をあえて稀薄しさらに一段と昇華させた思考のための言語」の必要性を説き、それを「メタラング」と呼んでいる⁽⁶²⁾。

メタラングは数や数式ほどには抽象的ではないが、日常言語とは比較にならぬくらい純粹思考に適する媒体である。自然現象を扱う諸学問が数学という言語によって進歩するように、人間を探究する学問では数学に担当するメタラングが推進力になると考えられる⁽⁶³⁾。

外山は非英語圏日本における「外国語学習の利点」は「母国語よりも容易にこのメタラングへ達しうることである」にあるという。そして「母国語はパロール的即物性が強烈であるからラングに至るのもなかなか困難である」が「外国語学習の多くはラングから始まるからパロールを経ないでメタラングに達することができる」点を強調する。ここで外山は明示的には語っていないが、こうした洞察が可能となる大前提として、非英語日本の公共圏においては KOKUGO という「思考のための共通言語」が存在しているという事実がある。日本では世界のヘゲモニー言語である ENGLISH の「世俗世界性」

が希薄であるが故に逆に安心して ENGLISH のパロールやラングも相対化できる文化的に有利な言語環境が存在しているのである。外山は ENGLISH が日常の生活言語ではない非英語圏にある日本の外国語習得環境について次のように云う――

外国語学習が感覚的要素を欠いているために、パロールの修得が困難で、どうしてもラング的なものになるという一般的傾向は、とりもなおさず、メタラングの昇華をそれだけ容易にする条件であるといえるはずである。普通に語学の泣き所とされるところは実は利点になるのである。実際に、母国語で達しにくい精神的なものが旧式といわれる外国語の教室で案外得られている。文化の創造を目指す大学教育においてラング的であることはすこしも恥じるに当たらない。それどころか、さらにメタラングへの昇華、言語による思考法の開発に前向きに取り組むべきであろう。メタラングは精神における神話的創造の原理だともいうことができる。総合的、多面的で、ときに混沌としてるかもしれないが、冷い不毛の秩序にはない生命力を蔵している。新しい人生や新しい時代、社会の創造も、具体的事象にとらわれない思考の方法論であるメタラングによって可能であろう⁽⁶⁴⁾。

以上のように外山の主張の骨子は、非英語圏日本において「思考と文化の創造を可能にする」ような「語学の哲学」の必要性にある⁽⁶⁵⁾。その観点からみても本稿のような「日本の英語」の概念の再吟味は必要不可欠となる。外山の輩に倣っていうならば、非英語圏日本国内で ENGLISH と KOKUGO の〈空〉間に働いている「目には見えないメタラングとしての EIGO の創造的破壊の効用価値」を見失うことがあってはならないのである。

「日本の英語」(EIGO)とは、フィジカルな ENGLISH とフィジカルな KOKUGO の間 (AIDA) のメタフィジカルな〈空〉の位相に配置された〈中間的メタ言語 (metalanguage-cum-interlanguage)〉である。外山は浄瑠璃作者の近松門左衛門の作品から引用しこの〈空〉間を「虚実皮膜の間」と呼んでいる⁽⁶⁶⁾。本稿の帰結も、目に見えるフィジカル (形而下) で「役に立つ」ENGLISH と KOKUGO の「実」用の位相に対して、目には見えないメタフィジカル (形而上) の〈虚〉用の位相で「役に立つ」言語が EIGO である、と換言することができるように思う。

おわりに

本稿では「英語 (EIGO)」という概念が非英語圏日本のローカル (特殊) な言語空間の中で ENGLISH と KOKUGO の連続的な語感をもって認識されていることを論じ

ることができた。またその論点を非英語圏日本の「英語」研究と英語圏のイングリッシュ・スタディーズの「日本の英語」に関する先行研究の議論の文脈に位置づけることもできた。しかし、本テーマにはもう一つの大きな課題が残されている。それは ENGLISH と KOKUGO のフィジカル感覚の〈空〉間に生まれるメタフィジカルな EIGO 感覚には新しい文化を生み出す創造的な効用がある一方で、そこには副作用も生み出されている、という事実である。この副作用とはメタフィジカルな EIGO 感覚がフィジカルな感覚に及ぼす相対化（破壊）作用によって、多くの日本人英語学習者を ENGLISH の身体感覚に結びつけ難く（言語習得を阻害）させてしまうという一種の心身問題（mind-body problem）を意味している。EIGO 感覚によって WE（我々）という NIPPON の集団的アイデンティティと KOKUGO 感覚が強固に結びつき過ぎるが故に、その国内言語感覚が逆に邪魔をして、国際空間に開かれた I（私）という個人的アイデンティティに根差した ENGLISH の国際言語感覚を「身に付け」難くさせてしまうのである。非英語圏の「日本の英語」の概念のパラドックスが生み出す「破壊作用」の負の側面については稿を改めて論じていきたい。

《注》

- (1) Robert Eaglestone, *Studying English: A Guide for Literature Students*. (London and New York: Routledge, 2016), p. 7
- (2) Edward Said, *Humanism and Democratic Criticism*. (New York: Palgrave, 2004), p. 28
- (3) 文化意味論・記号論的視座については池上嘉彦『記号論への招待』（岩波書店 1984 年）を参照。
- (4) 「特殊性」とはどの国の文化にも存在するものであるが、本稿でもこの用語を日本の文化歴史的・地政学的条件から生まれた特徴という意味で用いており、その対立概念に「西洋の普遍性」を位置づけるものではない。
- (5) 本論では「イングリッシュ」と「英語」と「国語」が比較・対照の対象となるキーワードとなっているため、議論上それぞれの用語の内実を区別するため ENGLISH や KOKUGO や EIGO のように大文字のローマ字表記してある。
- (6) Said, *op.cit.*
- (7) 杉本つとむ『日本英語文化史』（八坂書房、1985 年、7-9 頁）：実際に日本で最初に正式に生きた英語に接触していた日本人は徳川家康であった。イギリス人航海士のウィリアム・アダムズ William Adams が乗った船が激しい暴風雨によって日本の九州、豊後の海岸に漂流した。それは関ヶ原の合戦の数カ月前（慶長 5 年 3 月 16 日：4 月 19 日）のことであった。家康はアダムズを丁重に扱い、彼から幾何学や数学を学んだという。アダムズは日本における当時のヨーロッパの科学や技術の紹介者となった。
- (8) 同書（杉本、1985 年）によると、英語のアルファベット文字は「英吉利国字」、英文法書は「英吉利文話之凡例」、英会話教本などは「英米対話捷」と呼ばれていたことが分かる。
- (9) 当時の「日本の言語」の分裂状況についてはイ・ヨンスク（1996）の『国語という思想』を参照。
- (10) 当時の日本と英米両国の言語事情の中であって、森有礼は自らの「英語採用論」言説（米

- 国の言語学者への手紙)の中で日本国内の「国語」改革において ENGLISH の導入を検討し、それと同時に英米両国の「国語」(=ENGLISH) 改革(正書法の整備)の必要性まで説いている(Kobayashi 2009)。
- (11) 世界で英語の概念やイメージがどれくらい変容してきているかはリチャード・ベイリーの *Images of English: A Cultural History of the Language* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991) に詳細に記録されている。
 - (12) Bill Ashcroft et.al, *The Empire Strikes Back*. (London and New York: Routledge, 1989)
 - (13) ビル・アシュクロフト他『エドワード・サイード』(青土社, 2005 年)
 - (14) Solma K. Sonntag, *The Local Politics of Global Language*. (Oxford: Lexington Books. 2003) “Ultimately, the local politics of global politics turn on the local configurations of power.” p. 2
 - (15) エドワード・サイード『文化と帝国主義 1』(みすず書房, 1998 年, 137-138 頁), 「対位的読解は, 両方のプロセス, つまり帝国主義のプロセスと, 帝国主義への抵抗のプロセスの両方を考慮すべきであるということだ。テキストを読むときに, 視野をひろげ, テキストから強制的に排除されているものを含むようにすればいいのである。」このサイードのロジックを本稿のテーマにも援用してみれば, ENGLISH は大英帝国(その植民地であった米国)の言語であり, KOKUGO は大日本帝国の言語であったわけであるから, この帝国主義の時代の産物である両言語のヘゲモニーを巡る争いの中で「強制的に排除されて」しまっている「日本の言語(≒EIGO)」の文脈を掘り起こす議論を展開すればよいということになる。
 - (16) Eaglestone, *op.cit.*
 - (17) 管見によれば, そのような比較文化的視点をもってなされた「日本の英語」研究として, その筆頭に挙げなければならない先行研究は中村敬の『英語はどんな言語か——英語の社会的特性』(三省堂, 1989 年)であろう。中村は非英語圏日本と英語圏の「英語」問題を「国語と国民国家」の議論に連結させながら, 通時的かつ共時的な視座から多角的に論じる地平を切り拓いた先駆者である。またその他の関連先行研究に渡部昇一による『イギリス国学史』(研究社, 1990 年)なども挙げることができよう。渡部は「日本の国学史」の視点から「イギリスの国学史」である「英語」史の研究を行っている。しかし非英語圏日本国内においてこのような文化政治的かつ比較文化的な視角から行われる学術レベルの「英語」研究は非常に少ないといえる。
 - (18) 田中克彦『ことばと国家』(岩波書店, 1981 年)
 - (19) 「公共圏」とはヨーロッパの哲学者(ユルゲン・ハーバーマスやミシェル・フーコーなど)たちの哲学・批評の文脈で使われる概念(用語)である。本稿ではグローバルな英語圏の言語空間を 1 つの ENGLISH の「公共圏」と位置づけ, それを相対化する非英語圏日本の言語空間をもう一つの KOKUGO の「公共圏」として捉え, その国際語と国内語の文化政治交渉の文脈を掘り起こす議論を展開する。「公共圏」の概念については花田達郎『公共圏』(彩流社, 2020 年)を参照。
 - (20) Swales, J. M. の *Genre Analysis: English in Academic and Research Settings* (Cambridge: Cambridge University Press. 1990 : pp. 24-27) で概念化された用語であるが, 本稿では主に英語圏のイングリッシュ・スタディーズの中のイギリスの「国語(Standard English)」研究に援用している Richard. J. Watts (Bex, Tony. and Watts, Richard. J. *Standard English: The Widening Debate*. London and New York: Routledge. P. 43) の以下の定義を参照しながら日本の KOKUGO (Standard Japanese in Japan) の文脈に適用している。引用英文: “I define the term ‘discourse community’ as a set of individuals who can be interpreted as a community on the basis of the ways in which their oral or

- written discourse practices reveal common interests, goals, and beliefs, i.e. on the degree of institutionalization that their discourse displays... Thus, a discourse community may show strong or weak member affiliation to the values of the community, and the community itself may only become 'visible' through the course of time. In this sense, of course, a discourse community might also be defined as an embryonic institution with its own historicity.”
- (21) 「媒介言語」については『媒介言語論を学ぶ人のために』（木村護郎・クリストフ・渡辺克義編）に詳しい。
- (22) 外山滋比古『日本の英語、英文学』研究社、2018年。外山は「日本の英語」と「日本の国語」と「日本の文学」と「日本の英文学」に対する研究を数多く残した日本の最後の英学者の一人である（2020年7月30日逝去）。外山は「日本の英語」の変遷を戦前から戦後に亘りつぶさに目撃してきた、日本の「英学」の伝統を継承する最後の生き証人といってもよい存在であった。英学者中村敬『英語とはどんな言語か——英語の社会的特性』（三省堂、1989年、152-153頁）の中には、非英語圏日本の英学の伝統の中で ENGLISH を「相対化」する研究者（英学者）の系譜が記されている。英文法や辞書編纂において膨大な業績を残した英学者斎藤秀三郎（1866-1929）をその第1号とし、その最後に外山滋比古（1921-2020）の名が記されている（なお、非英語圏日本において ENGLISH を「対象化」した英学者の系譜には中村敬（1932- ）自身も含まれていることをここに明記しておきたい）。
- (23) ロバート・イーグルストン『「英文学」とは何か——新しい知の構築のために』（川口喬一訳研究社、2003年）の原書のタイトルは “*Studying English: A Guide for Literature Students*”（2016）である。しかし日本語版に翻訳されると English が「英文学」と括弧つきで表記されている点に注目しておこう。まさにこの記号概念の差異（ズレ）こそが非英語圏日本の言語空間内で ENGLISH の概念がもつ文化意味論上の〈揺らぎ〉を示唆しているからである。外山滋比古であればイーグルストンの書名も「〈英語、英文学〉とは何か——新しいリテラチャー研究のために」と翻訳したであろう。
- (24) 自国語の定着化してしまっている翻訳語を「対象化」することの難しさについて鈴木貞美（1998年、40頁）は『日本の「文学」の概念』において以下のように語っている。「言葉の歴史を調べる際に、ある時代に用いられた言葉が、見かけ上、現在のわれわれと同じ言葉であるために、別の意味をもっていることに気づかず、われわれの観念をそれに投影して読みちがえたり、あるいはわれわれの観念とは異なるということだけで、考察の対象から外してしまったり、よく検討せずに古いとか、間違いであるとか、一方的に裁断してしまうことは往々にして起こることだ。また、われわれの言葉と観念にあたるもののみを対象にしていると、同じ時代の、同じ言葉の別の用法を無視したり、同じ観念が別の語で語られていることに気づかなかつたりすることになる。これでは「文学」の歴史には、あちこちに罣がしかけられているかのようなではないか。」これはまさに本稿のメインテーマ（「日本の英語」の概念）の研究の難しさについても当てはまる。
- (25) 鈴木、前掲書 同頁。漱石の『文学論』から引用。「漢学に所謂文学と英語に所謂文学とは到底同定義の下に一括し得べからざる異種類のものたらざる可からず」
- (26) 漱石は非英語圏における「日本の英語」と「日本の文学論」を展開する時に、新しい言語（「国語」）とその表現形式を追求した際に援用した学問領域は主に心理学と社会学であった。これは非英語圏日本におけるコトバとココロとシャカイの関係性を新しい次元から再編成（創造）しようと試みていたことを示唆している。
- (27) 外山、同書、24頁
- (28) 外山滋比古『外国語を考える』ELEC 出版部、1972年、16-17頁 本書で外山は「日本の英語」の本質は「後段言語（metallanguage）」にあると述べている。日本における外国語

- の「メタラング」機能については同書の「メタラングの修得」(110-113 頁)を参照。
- (29) 外山, 同書, 16 頁
- (30) 近代性とは「論理性」のことと言い換えてもよい。加賀野井秀一は『日本語は進化する』(NHK 出版, 2002 年)の中で、日本では歴史的に外国語を「日本の言語」に組み込むことで「日本語」の情意表現の中に「日本語の論理性の脈絡」(228 頁)を生み出してきた点について言及している。EIGO の働きは「日本語の論理性の脈絡」を生み出す上で大きな役割を果たしているということになる。
- (31) 松岡正剛は『間の本 — イメージの午後 The Book of MA』(工作舎, 1980 年)の中で、日本文化の様々な事象に発現する「間」の原理を物理学の湯川秀樹博士の現代物理学の素粒子論における「中間子」の働きを例に挙げながら説明している(112-113 頁)。「中間子」とは単に素粒子 A と B の「対」の間の媒介するものではなく、その 2 つを包み取り巻く空間が「間」となり、その空間全体を媒介するのが中間子の働きであるという。本稿では日本文化のこの「間」の働き(原理)に注目し、ENGLISH と KOKUGO の対言語空間全体を媒介する EIGO の働き(特徴)を析出する試論となっている。木村敏は『あいだ』(弘文堂, 1988 年)の中で「この日本の文化の「間」を AIDA と読み、「主体的と主体との間主体的な「間」が個別的な主体の内部の「あいだ」を 1 つに統合する」働きを「メタノエシスの原理」と呼んでいる(29-51 頁)。
- (32) 「語感」については中村明『センスある日本語表現のために — 語感とは何か』(中央公論社, 1994 年)も参照
- (33) 小川芳男『英語に生きる』英潮社, 1978 年, 115 頁
- (34) 非英語圏と英語圏の間(AIDA)の内延と外延の重層的位相では、「日本の言語」の主体認識は常に流動的かつ連続的な様態として機能している。言語認識の「自己運動的な動的構造」に関わる「主体内部のあいだ」と「主体の二重性」においてに木村敏は次のように語っている。「二つの主体が別々に存在するわけではなくて、第二主体がその一局面として第一の主体を含んでいる」「そしてこの主体内部で働いている「間」のメタノエシスの原理が、さらに高次の間主体的なメタノエシスの原理によって方向づけられ、それに包まれるということになる。そしてこのようにして一見無限に進行して行くかに見える包み包まれる関係は、実はたった一つのノエシスの作用、生命一般の根拠に根差した世界との関わりの原理としてのノエシスの作用が示す諸様態であるに過ぎない」(木村, 同書, 60-61 頁)
- (35) Stanlaw, *Japanese English: Language and Culture Contact*. (Hong Kong: Hong Kong University Press, 2004, p. 4) 日本語訳は筆者(以下同様)。“I should say at the outset that I — unlike some other authors — do *not* believe that the English used in Japan is actually *borrowed* per se; most ‘English’ found in Japan — to my mind, at least — created in Japan for Japanese purposes.”. ここでスタンローは English を括弧つきの ‘English’ と表記していることに注意されたい。
- (36) *Ibid.*, p. 286 “...however, we accept the fact, for better or worse, that English is a Japanese language. At first glance this might appear strange, even to those working in the ‘International English’ profession.... But I have attempted to show in this book, English and Japanese are now inseparable as the American and Japanese economies. Indeed, I would argue that Japan today could not exist without English, and that, as in India. English is essential for the functioning of Japanese society.”
- (37) Philip Seargeant, *The Idea of English in Japan*. (Bristol, Buffalo, and Toronto: Multilingual Matters, 2009), p. 153
- (38) Eaglestone, *op.cit.*, pp. 7-8 (日本語訳は筆者) “English, as well as how we see literature, is constantly changing. All disciplines change over time: chemistry is very

different now than how it was three hundred, one hundred or even fifty years ago. Moreover, disciplines are born, grow and die out over time. English is a relatively new subject: its modern form is only just over three or four generations old. It is also one of the most quickly evolving and developing subjects.... English as a subject has become much more wide-ranging and challenging, and these changes have affected all of us who study or teach English.” 注の(1)を参照のこと。

- (39) Seargeant, *op.cit.*, pp. 14-15 (日本語訳は筆者：以下同様) “A pre-established concept of ‘English’ is always an axiomatic starting point for any form of English language-related reflective practice. Although research takes English as its object of study, it must first designate what is meant by English, and thus the object of study is not objectively found, but partially predetermined according to the assumptions and interests of the research tradition.”
- (40) *ibid.*, p. 57 “In this way, the object is, in Harpham’s characterization, ‘arbitrary’. The axiom of English does not, therefore, have a fixed or universal value, and it is this difference in starting point which develops into different disciplinary traditions.”
- (41) *Ibid.*, p. 20
- (42) 「日本の英語」問題を非英語圏日本において本格的に取り組んだ研究者は中村敬 (1932-) である (『英語はどんな言語か — 英語の社会的特性』三省堂, 1989 年, 『なぜ, 「英語」が問題なのか? — 英語の政治・社会論』三元社, 2004 年)。本稿で取り上げている英語圏のイングリッシュ・スタディーズの「日本の英語」研究において中村の研究が全く取り上げられない事実自体がある意味で多くのことを物語っているといえる。中村の主要な研究のほとんどは非英語圏内の「国語 (KOKUGO)」で発表されていることから, 英語圏の研究者が日本のディスコース・コミュニティ内の主要先行研究に目が行き届いていないか, またはその研究の重要性が理解できずにいるか, いずれにせよ, 海外 (英語圏) のディスコース・コミュニティ内の「日本の英語」研究にはまだまだ多くの仕事が残されているといえる。
- (43) これはイ・ヨンスクが『「国語」という思想』で提出した, 「国語」という言語の文化的担保になる「日本人」イデオロギーへの視点と平行なものである。
- (44) Seargeant, *op.cit.*, p. 20 “As such, an analysis of such associations and the way they reflect and interact with social and political trends within the culture is of great importance for any debate about the place and state of English in Japan. Indeed, we can hypothesize that the conceptualizations of English that exists are not arbitrary in terms of their historical and political genealogy, and are thus likely to be significant in terms of the cultural work they perform. It would be mistaken, therefore, to dismiss them as simply wrong-headed and out of line with contemporary thinking in TESOL and applied linguistics studies. We are faced, then, with two specific questions. To what end are the conceptualizations of English within Japanese society the way that they are? and, what consequence do the structural dynamics with result in these context-specific conceptualizations have for the generation of the theoretical approaches that were discussed at the beginning of this chapter?”
- (45) 注(34)を参照のこと。
- (46) マクベイは日本の「ホンモノ」ではない「日本の英語」を ‘Japan-Appropriated English’ と ‘Fantasy English’ の 2 つにカテゴリー化している (2002 : 166-171 頁)。非英語圏日本という同質性の高い国民の言語環境において, 外国語である ENGLISH がそうした疑似的な動態となって発現することはごく自然な事象であるのだが, ここではマクベイが ‘Eigo’ を ‘Japan-Appropriated English’ と位置づけている点に注目したいと思う。ただし, その

- 議論からは「日本の英語 (EIGO)」が KOKUGO の「世俗世界性」に与える効用に関する知見は全く得ることができない。
- (47) Seargeant, *op.cit.*, p. 85, p. 153 “...act as a further boundary between Japan and outside world.” “English — as both concept and practice — already exists as a site and as a vehicle for cultural expression and for the brokering identity in Japan.”
- (48) Seargeant, *op.cit.*, p. 133 サージェントはロラン・バルトや池上嘉彦 (Ikegami, *The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture* (Amsterdam: John Benjamins, 1991) の日本文化空間の記号論的解釈を引き合いに出しながら、非英語圏日本の ENGLISH の概念に肉迫している。“If we adapt this formula we can, perhaps, gain an insight into the way in which, in extreme (though numerous) examples, a similar process is at work with the English language in Japan.”
- (49) *Ibid.*, pp. 132–153
- (50) *Ibid.*, p. 143 “This book so far has been concerned primarily with ways in which this symbolism boundary is set, and the discourses and debates that are involved in *the process of creating a shape for what is to qualify as ‘English’*, both in Japan and in more general applied linguistic theory.” (イタリックは筆者) ここでサージェントは English にアポロストフィーで括っている点に注目しておこう。これはサージェントが非英語圏日本の English の概念が特殊化言語空間に存在していることに気づき始めていることを示唆している。
- (51) 成毛眞『日本人の 9 割に英語はいらない』祥伝社, 2013 年
- (52) 同書, 4 頁
- (53) 同書同頁
- (54) 加賀野井秀一 (前掲書, 2002 年) の「情緒表現形式を論理表現形式へ」という視点も非英語圏の外国語効果の一つである。『日本語は進化する』(2002) は外「国語」の学修によって自「国語」が進化する, という意味である。
- (55) ただし, 筆者はここでこれからも「そうあるべきである」といいたいのではない。そうではなく, 非英語圏日本の「国語」公共圏内における「日本の英語」を考えるためにも, 「自然にそうなるべくしてそうになってきた」言語社会的・歴史的事実を, 海外のイングリッシュ・スタディーズの ENGLISH の概念を「公理」にしながら否定的に論じてしまうのではなく, まずはそれを非英語圏の「英語研究」にとって無視することができない ENGLISH-EIGO-KOKUGO の三価構造の視座から批判的に再認識・吟味することが必要ではないか, というのが筆者の議論 (問題提起) である。
- (56) 外山滋比古『外国語を考える』, 108–19 頁
- (57) 同書, 180–194 頁 (「新外国語論」)
- (58) この点については拙稿「英学思想史への一視角」(2011) を参照されたい。
- (59) 外山, 同書, 36 頁
- (60) 同書, 37 頁
- (61) 同書同頁
- (62) 同書, p. 110–113 (「メタラングの修得」)
- (63) 同書, p. 111
- (64) 同書, p. 112
- (65) 同書, p. 109
- (66) 外山がいう「虚実皮膜の間」の「虚」または「空」間の創造的な働きは日本の英学思想の重層的構造とも深く関わっている。英学思想に見る「虚実」構造のダイナミズムについては拙稿「英学とプラグマティズム」(2017) も参照されたい。

引用・参考文献

- イ・ヨンスク (1996) 『「国語」という思想』 岩波書店
- 池上嘉彦 (1984) 『記号論への招待』 岩波書店
- エドワード・サイード (1998) 『文化と帝国主義 1』 みすず書房
- 小川芳男 (1978) 『英語に生きる』 英潮社
- 加賀野井秀一 (2002) 『日本語は進化する』 (日本放送出版会)
- 木村護郎・クリストフ・渡辺克義編 (2009) 『媒介言語論を学ぶ人のために』 世界思想社
- 木村敏 (1988) 『あいだ』 弘文堂
- 小林敏宏 (2011) 「英学思想への一視角 — 兵学と英米地域研究の弁証法的変容に関する考察 —」 拓殖大学論集(284) 人文・自然・人間科学研究, 第 26 号, 1-18 頁
- (2017) 「英学とプラグマティズム — 19 世紀後半の日米間に見る「実学」思想の重層的構造への視座 —」 拓殖大学論集(306) 人文・自然・人間科学研究, 第 37 号, 1-23 頁
- 杉本つとむ (1985) 『日本英語文化史』 八坂書房
- 鈴木貞美 (1998) 『日本の「文学」の概念』 作品社
- 田中克彦 (1981) 『ことばと国家』 岩波書店
- 外山滋比古 (1972) 『外国語を考える』 ELEC 出版部
- (2018) 『日本の英語, 英文学』 研究社
- 中村明 (1994) 『センスある日本語表現のために — 語感とは何か』 中央公論社
- 中村敬 (1989) 『英語はどんな言語か — 英語の社会的特性』 三省堂
- (2004) 『なぜ, 「英語」が問題なのか? — 英語の政治・社会論』 三元社
- 成毛真 (2013) 『日本人の 9 割に英語はいらない』 祥伝社
- 花田達郎 (2020) 『公共圏』 彩流社
- ビル・アシュクロフト他 (2005) 『エドワード・サイード』 青土社
- レオ・レオーニ・松岡正剛 (1980) 『間の本 — イメージの午後 The Book of MA』 工作舎
- ロバート・イーグルストン (2003) 『「英文学」とは何か』 (川口喬一訳) 研究社
- 渡部昇一 (1990) 『イギリス国学史』 研究社
- Ashcroft, Bill. et.al (1989) *The Empire Strikes Back*. London and New York: Routledge.
- Baily, Richard W. (1991) *Images of English: A Cultural History of the Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Barthes, Roland (1982) *Empire of Signs*. London: Cape
- Bex, Tony. and Watts, Richard. J. (1999) *Standard English: The Widening Debate*. London and New York: Routledge.
- Eagleton, Robert (2009) *Doing English: A Guide for Literature Students*. London: Routledge.
- (2016) *Studying English: A Guide for Literature Students*. Routledge
- Ikegami, Yoshihiko (1991) Introduction: Semiotics and Culture. In Y. Ikegami (ed.) *The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture* (pp. 1-24), Amsterdam: John Benjamins.
- McVeigh, Brian J. (2002) *Japanese Higher Education as Myth*. New York and London: M.E. Sharpe
- Pennycook, Alistair. (1994) *The Cultural Politics of English as an International Language*. London and New York: Longman.
- Said, Edward (2004) *Humanism and Democratic Criticism*. New York: Palgrave.
- Seargeant, Philip (2009) *The Idea of English in Japan*. Bristol, Buffalo, and Toronto:

- Multilingual Matters.
- Sonntag, Solma K. (2003) *The Local Politics of Global Language*. Oxford: Lexington Books.
- Stanlaw, James (2004) *Japanese English: Language and Culture Contact*. Hong Kong: Hong Kong: University Press.
- Swales, John. M. (1990) *Genre Analysis: English in Academic and Research Settings*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Toshihiro, Kobayashi (2009) *Mori Arinori: New Light on his Weltanschauung in Late Edo and Early Meiji Japan and on His Language Reform Discourse*. Seijo University English Monograph No. 41.

(原稿受付 2020 年 6 月 29 日)